



## 第4分科会

### 「難民を知るワークショップ II～ミャンマー避難民編～」

●担当：安達三千代（認定NPO法人IVY）、佐藤佑香（IVYyouth、山形大学）

●分科会のねらい・目的：

- ・一人でも多くの方々に、ミャンマーからバングラデシュへ逃れているミャンマー避難民（ロヒンギャ難民）の実情を知ってもらうため、バングラデシュの難民キャンプで支援を行っているIVYがワークショップを作成した。
- ・難民キャンプの現状や課題を知り、IVYが行っている難民支援をはじめ、国連などが行っている支援についても知ってもらう。

●参加者人数：32名

#### 1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク	<p><u>グループに分かれて自己紹介</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者を7グループに分け、自己紹介をして頂いた。これからロールプレイで家族となるため、自己紹介を通じて参加者同士打ち解けてもらった。</li> </ul>
<p>グループワーク ファシリテーター： 安達 三千代</p>	<p><u>難民の定義に関するクイズ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・難民条約の難民に関する定義の文から穴埋めクイズを行い、「難民とはどのような人なのか」を知ってもらった。</li> <li>・条約難民、環境難民、経済難民、国内避難民など9つの「難民」に似た状況の選択肢の中から、どれが「条約難民」なのかをクイズにした。</li> </ul> <p><u>写真並べ替え「ミャンマーから逃げるか、とどまるか」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5枚の写真を使って「ミャンマーからバングラデシュへ逃れるまでの過程」を考え、写真を並べ替えてもらった。参加者たちは写真の状況や写っている人々の服装、表情などを見ながら、どんな場面なのか想像しながら写真を並べ替えていた。</li> </ul>
	<p><u>ロールプレイ「バングラデシュへ」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ミャンマー軍の掃討作戦により村から逃れた家族が、バングラデシュへ逃れるために国境ゲートで難民申請書に記入し、難民キャンプにたどり着くまでを体験してもらった。</li> <li>・参加者は、難民登録申請書にどんなことを書いたらよいか戸惑う姿もあったが、家族で相談しながら申請書を書きあげ、無事に難民登録証を受け取り、難民キャンプへ入ることができた。難民になるためには登録が必要なことを初めて知った方もいた。</li> </ul>



	<p><u>ロールプレイ「難民キャンプでの生活」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・7枚の難民キャンプの写真を見ながら、これから各家族が暮らすキャンプ内の様子を知ってもらった。住居、学校などの施設が写った写真を見ながら、「学校もあるんだね」「食べ物はどやって手に入れているのかな」など、疑問も浮かんでいる様子だった。</li> <li>・キャンプ生活3ヶ月目、雨季に入ったバングラデシュでは大雨や台風により、住民の生活にも影響が出始めていた。各家族には4枚の写真を見ながら、キャンプ内でどのような問題が起きているのか考えてもらった。</li> </ul> <p><u>ロールプレイ「進路のジレンマ～キャンプにとどまる？出ていく？～」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンプ内で「かわら版」が配られ、難民キャンプの外で暮らす選択肢もあることがわかった。そこで各家族に、「かわら版」も参考にしながら、キャンプにとどまるか、キャンプを出ていくかを相談してもらった。</li> <li>・これまでのキャンプでの生活状況を振り返ると同時に、キャンプが閉鎖するという情報を知り、ミャンマーへ帰るといった決断をした家族が多かった。</li> </ul>
ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IVYがバングラデシュのコックスバザール県にあるクトゥパロン難民キャンプで行っている水衛生の環境改善事業について紹介した。</li> <li>・ミャンマー避難民を取り巻く国際社会の動きについて説明した。</li> </ul> 

### 3. 参加者アンケート

- ・有意義なワークショップでした。これからもたくさん機会を設けてほしいです。素晴らしい活動に拍手です。
- ・難民キャンプの過酷な生活条件と水と衛生の重要さがよくわかりました。
- ・日本は難民と接触する機会がほとんどありませんが、深く考えるきっかけになりました。
- ・講義形式ではなく、自ら体験できる設定を今後学校でも活用させていただき、生徒たちと考えていければと思います。
- ・助けてあげたい気持ちが強くなりました。

### 4. 担当者所感

【ファシリテーター：安達 三千代（認定NPO法人IVY）】

ワークショップ終了後の、私の最大の楽しみは、参加者の方々に書いていただいた「ふりかえりワークシート」を読ませていただくこと！特に今回は「難民について、もっと知りたいことはありましたか」という質問への回答が秀逸でした。「なぜバングラ政府は100万人近い難民を受け入れたのか、受け入れることができたのか」「彼らが何を大切にし、どういう選択を希望しているのか」「難民が選択した進路がどうなのか」・・・いつか、どこかで、私も、これらの難しい質問にその答えを見つけて話ができるようにそしみます。